様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２８日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７２０２３２
研究課題名（和文）　近世・近代移行期における開港場行政形成過程の研究
研究課題名（英文）　Research of the process in which the administration in the open port formed in the transition period from early-modern to modern Japan

研究代表者
添田　仁（SOEDA HITOSHI）
神戸大学・大学院人文学研究科・特命講師
研究者番号：60533586

研究成果の概要（和文）：近代日本は、近世の閉鎖的な「鎖国」を打開し、「開国」によって海外との「自由」な交通・取引を実現した国家として理解される。このような近世と近代との国際関係史が断絶したものであることを前提に議論する研究潮流を見直すために、近世・近代移行期の開港場における行政実務の構造的特質と、前近代の国際都市長崎で活躍した実務役人が開港場で果たした役割を分析することで、近代日本における国際関係の内実を近世的な到達点の上に解明した。

研究成果の概要（英文）：Modern Japan is understood as following states. That is, She is understood as a country which conquered "SAKOKU" in modern times, and realized free traffic and dealings with a foreign country and which was got blocked and achieved the "KAIKOKU".It is required to improve the situation of such history-of-international-relations research. Therefore, I analyzed the structural special feature of the administration in the space opening a port to foreign trade. Furthermore, I analyzed the role which the government official who played an active part in Nagasaki which is a pre-modern international city played. About the actual condition of the administration in the space in modern Japan opening a port to foreign trade, it solved based on the historical continuity from early-modern.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：歴史学・日本史学
キーワード：開港場、居留地、長崎

１．研究開始当初の背景

（１）通時的課題：港市研究における近世・近代の断絶

日米和親条約締結後の下田・箱館を皮切りに、安政６年（1859）に長崎・神奈川（のちに横浜）・箱館、続いて兵庫・新潟が開港され、明治元年（1868）７月には大坂も開港場

となるなど、江戸幕府のもと長崎・対馬・薩摩・松前に限定されていた対外関係の窓口が、幕府の倒壊とともにその間口を広げたことはよく知られる。しかし、近世港市における外交・貿易・都市運営にかかわる実務が、近代の開港場での行政と如何なる関係を切り結んでいたのかという点については、これまで意識的に議論されていない。

近世・近代移行期の外交体制の変化については、貿易・交通の両側面において国家的規制の強さがクローズアップされる「鎖国」から、自由な商売・移動が保障された「開国」へという、維新変革と表裏一体をなす転換点＝＜近世・近代の断絶＞として捉えられてきた。ゆえに「開国」に際して外交交渉や開港場の行政にあたった担当者についても、強圧的な欧米諸国の圧力の前にいわゆる不平等条約を締結し、彼らの領事裁判権を認め、また関税自主権を奪われるなど、国際感覚に乏しく、欧米列強の波に抗し得ない幕府の「無能な」役人としての姿が強調されてきた。それは、のちに領事裁判権の撤廃と関税自主権の回復を実現させた「優秀な」外務省官僚とは対照的な描かれ方であった。

しかし、近世の港市行政で蓄積した人材・知識・ノウハウを引き継ぐことなしに、近代の港市行政が成立し得えたとは考えにくい。近世と近代の港市行政を有機的に結びつけるためには、近世以来の存在である長崎地役人をはじめとする港市行政の担当者が、近代の開港場において果たした役割と成果について実務レベルから解明していく必要があると考えた。

（２）共時的課題：開港場を横断的に捉える視角の欠如

開港場における行政の研究は、横浜や神戸などをフィールドに居留地や売買春統制、コレラなど伝染病への対策といった視点から、隣接する都市や農村との関係に規定された開港場の特質に即して個別に進められている。しかし実は、開港場の行政の実務担当者は、自身の管轄を越えて、他の開港場の行政担当者と密な連携関係を構築していた。

たとえば長崎県（府）と開港場を擁する府県の外務課の職員同士は、対外的な問題群について書翰で相互に諮問・確認しながら職務に従事していた。これは、平成 20 年度科学研究費補助金（奨励研究）の交付を受けて、長崎県（府）の「外務課事務簿」（長崎歴史文化博物館所蔵）の一部を調査した結果明らかになった事実である。このように個々の開港場を単位とする行政の枠組を越えて、横断的に展開した開港場の行政をここでは〈開港場行政〉と呼びたい。

開港場はその周辺地域の政治的・経済的な核であると同時に、国際社会と接する国家的な窓口でもあった。ゆえに開港場の行政には、対外的契機により発生する多様な課題に統一的に対応するために、個々の開港場を横断的に展開する実務担当者の連携システムが必要とされたのである。近世・近代移行期の港市行政の内実を明らかにするためには、各開港場の実務担当者同士の具体的な連携関係を踏まえた〈開港場行政〉の構造とメカニズムを明らかにすべきであると考えた。

２．研究の目的

開港場はその周辺地域の政治的・経済的な核であると同時に、国際社会と接する国家的な窓口でもあった。とくに、近世・近代移行期の開港場では、対外的契機により発生する多様な課題に統一的に対応するために、個々の開港場の枠組みを越えて横断的に展開する実務担当者の連携システム＝〈開港場行政〉が必要とされた。

この（１）〈開港場行政〉の構造と機能、メカニズムについて、（２）開港場における実務の先駆として存立した長崎の歴史的意義を踏まえながら具体的に明らかにすることで、近世・近代移行期の外交体制の実態を近世的な到達点の上に解明し、貿易・交通の両側面において国家的規制の強さがクローズアップされる「鎖国」から、自由な商売・移動が保障された「開国」へという、維新変革と表裏一体をなす転換点＝＜近世・近代の断絶＞として捉えられる歴史イメージを払拭することを目的とした。

３．研究の方法

（１）〈開港場行政〉において中核的役割を担った実務役人の異動の傾向を明確化するために、いわゆる開国期から明治０年代までを対象として、近世・近代を通して〈開港場行政〉に従事した人びとの役職・名前を収集し、当該期の彼らの動静分析を行った。史料は、近世の「役人帳」と近代の「官員録」を連続して用いた。

（２）〈開港場行政〉における政策決定の過程を解明するために、各開港場の実務担当者間のやりとりから、〈開港場行政〉における情報交換、政策吟味の過程を分析した。史料は、長崎歴史文化博物館に所蔵されている「外務課事務簿」を中心に、各地の税関にのこされた記録や「五代友厚関係資料」など当時の財界人の記録とも比較・検討しながら活用する。

（３）〈開港場行政〉で蓄積された手法と、外務省の政策との比較を行い、それぞれの特質を分析した。長崎に蔵屋敷を置いていた各

藩の記録や、外務省による対外政策と、〈開港場行政〉によるそれとの相違点を明確化し、その上で、相互に与えた影響について分析した。

４．研究成果

（１）近世・近代移行期における港市行政の連続的側面の解明
・長崎・横浜・神戸・大阪の府県外務課の「官員録」「職員録」から、開港場で勤務した職員の役職と名前を抽出し、維新期における長崎から各開港場への人員の異動の傾向を分析した。結果、江戸時代には長崎地役人であった人びとが神戸・大阪に派遣され、〈開港場行政〉の中核として活躍していたことが明らかになった。
・長崎県（府）の「外務課事務簿」を素材に、各開港場における課題と、それを受けて〈開港場行政〉において長崎が果たした役割を分析した。結果、長崎地役人が「自由貿易」の実現を求めて開港場に押し寄せてくる外国人と直接対峙し、近世以来のノウハウを用いて、開港場間での貿易実務の統一や外国人とのトラブルの調整を行っていたことが明らかになった。
・以上の事実は、近世・近代移行期を維新変革と表裏一体をなす外交体制の転換点＝〈近世・近代の断絶〉と捉える歴史イメージに対する反例としての意義を有する。すなわち、維新政権は旧体制による「鎖国」から、あらたに「開国」へ脱却するというイメージを喧伝したが、実態としては明治維新を経た後も、近世以来の「鎖国」的な要素を大いに引き継いでいたと言える。

（２）外務省政策の限界と〈開港場行政〉の独自性の発見
・維新政権は、開港場における「外雇ノ内人」（ラシャメン・仲仕などの肉体労働者）の厳密な把握について統一的な対策を打ち出せず、実態的には、各開港場において外国人との間に築かれてきた慣習によって形式的に管理されるにすぎなかったことが明らかになった。
・近世以来、外国人と接してきた長崎は、「外雇ノ内人」を管理するシステムを独自に生み出し、日本人の海外流出の監視や、海外からの送還まで担当しており、その経験や手法をもって〈開港場行政〉による海外流出者管理の実効性を支えていたことが明らかになった。
・〈開港場行政〉が外務省主導による国際関係の形成に取り込まれる契機については、今後の課題である。現在の見通しとしては、国家総動員体制の確立と同時並行的になされたものと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①添田仁「神戸外国人居留地と福原遊女・新撰組－神戸大学附属図書館所蔵コレクション「神戸開港文書」の可能性－」、『海港都市研究』、5 号、2010 年、pp.75-87、査読無、http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81002113.pdf

②添田仁「〈開港場行政〉の形成と長崎」（『ヒストリア』、218 号、2009 年、pp.162-192、査読無（依頼）

〔学会発表〕（計６件）

①添田仁「開港場神戸で石炭を掘る－石炭師・生野銀山石川八左衛門の挑戦－」、あさごの歴史と古文書講座、朝来公民館、2011 年 12 月 17 日

②添田仁・前田結城・澤井廣次「西摂地域における安政南海地震・津波の記録」、歴史資料ネットワークシンポジウム「東日本大震災関西で何ができるのか」、西宮市大学交流センター、2011 年 6 月 12 日

③添田仁「開港場神戸のウラ・オモテ－混浴・遊女・新撰組－」、神戸大学公開講座、神戸大学瀧川記念学術交流会館、2010 年 9 月 25 日

④添田仁「海港都市文化学研究の総括」、海港都市国際学術シンポジウム「越境する人々とナショナリズム」、クラウンプラザ神戸、2009 年 11 月 26 日

⑤添田仁「〈開港場行政〉の形成と長崎」、大阪歴史学会大会、関西大学、2009 年 6 月 28 日

⑥添田仁「神戸外国人居留地と遊女・浪士－神戸大学附属図書館所蔵コレクション「神戸開港文書」の可能性－」、神戸外国人華僑華人研究会、華僑博物館、2009 年 5 月 16 日

〔その他〕

①［書評］添田仁「神戸外国人居留地研究会編『居留地の街から』」、『神戸新聞』朝刊、2012 年 1 月 22 日

②［辞書］添田仁、長崎奉行・長崎奉行所・長崎代官所・長崎会所・長崎運上所・唐人屋敷・出島・長崎目付・長崎通詞・岩原屋敷・沖両番所・長崎御蔵・平戸商館・生野陣屋など18項目、大石学編『江戸幕府大辞典』、吉川弘文館、2009年

６．研究組織

(1)研究代表者
添田　仁（SOEDA HITOSHI）
神戸大学大学院人文学研究科・特命講師
研究者番号：60533586

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし